

青苗遺跡発掘調査概報

—道々奥尻島線青苗市街～空港間道路整備事業に係わる緊急発掘調査—

佐藤忠雄・山田忍

1978.3

奥尻町
奥尻町教育委員会

青苗遺跡発掘調査概報

道々奥尻島線青苗市街～空港間道路整備事業に係わる緊急発掘調査

佐藤 忠雄・山田 忍

1978.3

奥 尻 町
奥尻町教育委員会

目 次

1. 発掘調査の経緯	1
2. 調査団の構成	1
3. 青苗遺跡の位置および自然環境	2
4. 青苗道路の土層構成と遺跡との関連について	2
5. 調査の方法	6
6. 遺物および遺構の出土状況	7
町道分岐点	7
懸崖地点	8
貝塚地点	9
7. 新資料　—須恵系装飾土器	9
付 記	

1 発掘調査の経緯

本事業報告は道々奥尻線青苗山街～奥尻空港間の道路整備事業に係わる緊急発掘調査、昭和52年度分の概要である。

青苗遺跡の発掘調査は昭和51年4月5日に着手し、単年度内に現地作業を完了し、翌52年6月20日までに報告書を刊行の予定であったが、前年度報告でも述べたように縄文文化前期、中期の円筒下層式、上層式土器を主体とする遺物の包含層が掘開難度の高い硬質土層（火山噴出物が母材となつた粘土層で縄文文化中期の大規模な雨崩に押し流され再堆積したもの）によって作業進度が大幅に遅れたこと、また墓地前の1P5地点に発掘区の遺構が連続していることが確認され、新拡張区（183.12m²）が必要になったこと、加えて出土遺物の量が膨大であったことなどに起因して、貝塚地点、懸崖地点の調査日程に約30日間の不足を生じ、52年度に持ち越す結果となった。

昭和52年度の調査は墓地前地点で現道路下に及ぶ遺構存在箇所（489.2m²）、貝塚地点、懸崖地点の未調査分、それに前年対象外となっていた町道分岐点地区（1495.3m²）と墓地西側取付道路（200m²）を実施した。調査は同年4月7日に函館土木営業所が奥尻町と委託契約を締結し、4月25日より開始、11月23日現地調査を終了した。この調査過程で新たに懸崖地点（58.50m²）、貝塚地点（325.0m²）、墓地前地点（98.75m²）、町道分岐点（225.50m²）に拡張区設定の必要を生じ、現地発掘調査の期間は昭和53年8月12日まで延長されることになった。整備作業は引き続き11月25日より翌53年3月31日まで行なったが段階的に遅れがでてきているが、53年度内完結の見通しである。

2 調査団の構成

発掘調査責任者	越森幸夫	奥尻町長
発掘調査担当者	佐藤忠雄	日本考古学协会会员
調査員（土壤学）	山田 忠	専修大学北海道短期大学学長、教授
タ（測量）	三好文夫	旭川大学講師
タ（文化人類学）	河野本道	驹沢大学講師
タ（古生物）	金子浩昌	早稲田大学教授
タ（考古学）	其田良雄	旭川市博物館学芸員
タ（　　）	佐藤芳子	青苗遺跡専従調査員
タ（年代測定）	近堂佑好	帯広畜産大学助教授
調査員補助（土壤学）	山田 勝	青苗遺跡専従調査補助員
事務局	山下育三	奥尻町教育委員会係長
タ	泉沢克尚	青苗遺跡専従事務員

3 青苗遺跡の位置および自然環境

遺跡は奥尻島の南端にある青苗市街地の中心より北西方向 500 m の地点にある。遺跡が分布する範囲は寺屋敷段丘比高 50~60 m と青苗峰段丘比高 5 m 以上の海岸段丘上で、比高およそ 24~30 m、海に面する東南の緩斜面、崖上にある。遺跡の種類は遺物包藏地、竪穴、貝塚、墳墓などで、縄文文化前期から擦文文化期に及んでいるが、大半を円筒式土器文化と擦文式土器文化のものが占めている。両者が存在する比高は同レベルで上位に擦文式土器の貝塚や遺構があり、下位に円筒式土器の包藏地、竪穴、ピットなどの遺構がある。

これらの遺跡は当初から道路整備に関連するところに発掘区を設定しているので、便宜上地点として処理しているが、それぞれ町道分岐点を中心とした半径 200 m 一帯に広がる青苗遺跡の一部分である。

本年度に発掘区を設定した地番は奥尻郡奥尻町字青苗437の1, 438の1, 439, 440、米島4の1, 4の2, 5, 6の1, 6の2, 6の3, 8, 10の2, 10の3, 11, の1, 11の2, 13, 14の1, 14の2, 30の1, 30の2, 30の3で、調査面積は 2084.5 m² である。

遺跡の自然環境は殆んどが荒地で一部には根曲り箇が密生している。上層構成は町道分岐点一帯色土層、渡島大島八層、乙部層、褐色上層、駒ヶ岳層、黒色上層、再堆積層、黄褐色上層、貞岩基盤層で、前年の墓地前地点と大差ないが、遺物を包含する再堆積層がより厚くなっている。貝塚地点一帯斜面下方の貝層の切れる部分で地表より約 1.8 m の深さの灰褐色グライ層より縄文文化早期の土器が出土して再堆積層より更に下位の層の追跡が必要となった。（佐藤）

4 青苗遺跡の土層構成と遺跡との関連について

青苗遺跡は奥尻島の南端に発達している俗称千豊ケ丘と呼ばれている海岸段丘上に見出されている。瀬川秀良によると、この海岸段丘は 7 段に区分されるが、青苗遺跡の見出されたのは、2 段目の寺屋敷段丘の青苗墓地の周辺である。

寺屋敷段丘は一見平地のように見えるが、海岸に向け緩やかな傾斜をなしている。

寺屋敷段丘の基盤は貞岩であるが、その上を段丘堆積物が厚く被覆している。この段丘堆積物は粘土層で、今回これを奥尻ローム層と命名した。遺跡の一部には降雨の際、段丘の上方から流失して来た土壤が、奥尻ローム層上に再堆積し、この再堆積層の上に 6 種類の新期火山噴出物が、薄層乍ら糾然と降下堆積している。この 6 種類の火山噴出物は、今回の調査で、渡島大島に由来するものの 4 種類、駒ヶ岳に由来するもの 1 種類、噴出源不明ではあるが、恐らく神威岳に由来すると思われるもの 1 種類である。

遺物、遺構は奥尻ローム層と、再堆積層に出土していたが、火山灰層中には見出せなかった。しかし、火山噴出物の降下堆積年代が、遺物、遺構の出土状況や、その年代と深い掛り合いのあることが判明した。

以下、青苗遺跡の土層構成と是等の土層と遺跡の関連について、今回調査した結果の概略を解説する。

青苗遺跡の上層は次の8種類の異なる土層から構成されている。

- (1) 渡島大島ao層 (Osa_o層)
- (2) 渡島大島a層 (Osa_a層)
- (3) 乙部層
- (4) 渡島大島b層 (Osb層)
- (5) 駒ヶ岳e層 (Koe層)
- (6) 渡島大島d1ハン層 (Os_{d1}ハン層)
- (7) 奥尻ローム再堆積層 (再堆積)
- (8) 奥尻ローム層

(1) Osa_o層

(2) Osa層

何れも渡島大島の火山灰層である。Osa_oは現在の地表を構成している。その直下がOsa層である。

Osa_oは墨灰色の火山灰、土性は砂土、腐植を含む。一見したところ、Osaの腐植の集積している土壤学でいうA層の如く見えるが、Osa_o層とOsa層との境界が直線をなし明瞭であることと、青苗砂丘の調査の結果、Osa_oとOsaとの間に同様の海砂の狭まれていることが判ったので、Osa_oとOsaは腐植集積層と見られていた)。

Osaは渡島大島の噴出物であることは既に明らかにされているが、Osa_oについては、調査成績はない。今回現地調査の結果では、神威岳、或は駒ヶ岳に由来するものとの推論は成立しないし、北海道本島の調査によると、Osa_oはOsaに付随して堆積しているので、Osa_oはOsaの噴火活動の時に、一旦活動を休止したが、余り時間をおかずには再び噴火堆積したものと推定して、これにOsa_oと命名した。

Osa_oの堆積の厚さは20cm前後、Osaの堆積の厚さも20cm前後である。

Osaは1714年(268年前)渡島大島の噴火の堆積物であることは既に明らかにされている。

Osa_o、Osa共遺物、遺構は見出されていない。

(3) 乙部層

噴出源は未確認であるが、Osaの直下に堆積している黄白色の火山灰である。粒形やや粗で、Osaより白味を帯びている。上部に僅かに腐植を含む程度で、余程注意深く観察しないと、Osaとの区別がつかない。厚さ10~15cm、分布区域は、従来の調査成績と異なるところがあり、又渡島大島の噴出物であるとの確認もない。

奥尻町史によると、神威岳は1724年(254年前)に爆発しているので、Osaが、268年前の噴出物で、乙部層の噴出時期とのずれが僅か14年で、しかも乙部層の上部の腐植の集積が余程注意深く観察しないと判らない程の少量のものであるとの、Osaが乙部層の上位に堆積していることなどからして、乙部層の噴出源は神威岳でないかとの推定も成立つが、一方、神威岳には噴火口らしきものが見あたらないとの発表もあるので、従来通り乙部層としておく。乙部層には遺物、遺構は出土していない。

(4) Osb層

乙部層の直下に堆積し、層厚僅かに5cm、所によっては確認出来ないところもある。本来は洪積灰色の火山灰であるが、地表にさらされていた期間が相当長かったようで、腐植を多量に集積し、真黒な軽い火山灰となっている。

Osb層の直下にKoe層が堆積しているが、この火山灰層も地表で相当長い期間風化を受けた模様で、上部は多量に腐植を集積し、同じく真黒な土壤となっている。

青苔砂丘において、乙部層とKoe層は、はっきりその存在が認められるが、Osb層は、はっきりその存在を認められる程の厚さを有していない。そして乙部層とKoe層の間に約60cmの厚さで風積の海砂が挟まれ、この海砂層のほぼ中央のところに黒味を帯びた火山灰をまじえたと思われる帶状の部分があり、これがOsbの降下堆積し海砂とまざった部分と推定した。

砂丘における風積の海砂の堆積量は、風力・地形・其の他の条件などによって異なるものであるが、同一地点においては地形が何等かの作用で変化するか、風力の変化のない限り同一と推定すれば、このOsb層が乙部層とKoe層の間に集積した海砂のほぼ中間にあることは、Koe層の堆積後Osbの堆積迄の期間と、Osb層の堆積後乙部層の堆積の期間がほぼ同じと見てよいとの推定が成立つ。

Koe層の降下堆積は1700±130年前と云う成績が既に発表されており、乙部層の降下堆積は前記の通り、254年前であるから、Osbの降下堆積年代はその中間の723±130年前と云うことになる。

Koe層の堆積年代の判定にはKoe層に集積した腐植酸のC¹⁴の測定結果を利用しているので、Koe層の降下堆積年代はこれより若干古いと見た方がよい。この辺がOsbの堆積年代と推定しておく。

Osb層の直下に貝殻層が出上している。この貝殻層の直下にKoe層があり、このKoe層の上部は多量に腐植を集積し、その状況は貝殻層を欠除し、直接Osb層が被覆堆積している場合のKoe層と外観は極めて類似している。このことはKoe層の降下堆積後に貝殻を集積した住民が移住して来たのは、Koe層の降下堆積後相当長い期間を経ていたことを物語っており、むしろOsbの降下堆積の間近でないかとの推定が成立つ。

遺跡に井戸が発見された。この井戸の底の位置は基盤の奥尻ローム層である。従ってこの井戸を掘った当時は、當時既に降下堆積していた火山灰層は全部堀上げた筈である。ところが井戸の底には、Osao, Osa, 乙部, Osbの各火山灰が整然と堆積しており、これ等の火山層は井戸を掘った後に降下堆積したものである。井戸の底には擦文式高I型土器が出上していることからして、この井戸はOsbの直下の貝殻層を築いた住民の手によるものと考えてもよからう。

(5) Koe層

Koeは駒ヶ岳に由来する火山灰で、Osb層の直下に約3cmという薄層で堆積している。淡黄褐色の火山灰で、上部は腐植を多量に集積し黒色となっている。この腐植の集積層と、その直上のOsb層は同じく全層腐植を集積して黒色を呈しているが、Osbの方は團粒構造で黒光りをしており、Koeの方は單粒構造で黒色であるから、この両者は土壤学的には識別出来る。

Koeの降下堆積年代については1700±130年前と云う成績が発表されているが、前にも説明しておいた通り、この数字は、Koeの腐植酸のC¹⁴測定結果から割出したものであるから、実際の降下年代はこれより多少古いと考えてよい。

本層には遺物、遺構は出土していないが、Koe層の年代が、遺物の年代判定に関係のあるOsbの年代判定の有力な資料となったことは前記Osbのところで述べた通りである。

(6) Os白ハン層

Os白ハン層はKoe層の直下に堆積しており、渡島大島の降下堆積物であることは従来の調査結

果から判っている。只遺跡付近においては層厚10cm前後という薄層である。

Os はもともと白色の火山灰であったが、地表で長らく風化を受け、多量の腐植を蓄積して黒色となり、その中になおも白色の火山灰が班点状に残っていることから Os 白ハンと假に命名されたものである。しかし遺跡付近では層厚が薄いばかりでなく、汐風で塩分を含んだ関係もあって一層黒味を増し、白色の班点は殆んど見出されないが、特徴ある圓粒構造を呈している（降下堆積當時は単粒構造である）。Os 白ハン層の直上に堆積している Koe 層、或は直下に堆積している奥尻ローム層堆積層又は奥尻ローム層の腐植の集積層は何れも単粒構造を呈しているので、Os 白ハン層は土壤学的に識別出来る。

Os 白ハンの年代測定はないが、直上に堆積している Koe 層が前記の通り1700±130年前となっているから、これより古いと考える。

Os 白ハン層には遺物、遺構は出土しない。

(7) 奥尻ローム再堆積層（再堆積層）

本層は Os 白ハン層の直下に厚く堆積しているが、厚さは一定しないで、欠くところもある。母材は奥尻ロームと同質であるが、水の作用を受けた跡があり、土がよくしまっており、その固さは奥尻ロームより遥かに固い。大雨の際奥尻ロームが削剥され、これが下方に押し流されて再堆積したものと認め、奥尻ローム再堆積層と命名した。

本層には遺物として円筒上層式 a, b 型土器、円筒下層式 d₁, d₂ 型土器破片などが出土する。その内、円筒下層式 d₁, d₂ 型土器破片は土層中にさりげなく出土している。これは再堆積層が出来る時に、奥尻ローム層中に埋没されていたものが、土壤が削剥されて押し流される時に、土と共に堆積土中にまぎり込んだものと推察する。

再堆積層の出来た原因は、現在では想像に絶するような長い雨期又は豪雨のためと推測する。それは再堆積層の出来た後に現在迄 Os 白ハン、Koe、Osb、乙部、Osa、Osao の火山噴出物が、再堆積層上に整然と順序よく堆積しており、これ等火山噴出物は何れも層厚薄く、それに粘土質の奥尻ロームより大雨によって削剥され易い性質をもっているにも拘らず、そのような形跡のないところも伺われる。

再堆積層中にさりげなく出土する円筒下層式 d₁, d₂ 型土器破片は、繩文前期末のものであり、この時期は繩文海進の時期に相当することと照し合わせて考えてみると、繩文海進を同じした暖気と、空前絶後とも見られる長期に亘る雨期或は豪雨などのため、當時地表を構成していた奥尻ローム層を削剥、流失せしめ、この際奥尻ローム層中に置いてあった土器を破碎し乍ら下方に再堆積したものと推察する。この際削剥土の流路に当るところには再堆積層が形成し、流路にはずれたところは再堆積層が形成されない、奥尻ローム層の直上に Os 白ハン層が堆積している。遺跡の一部に再堆積のないところは、このような原因によるものと思う。

再堆積層中に出土する円筒上層式 a, b 型土器は、再堆積層の形成後に移住してきた住民の手になるものと推測する。この土器破片は、円筒下層式 d₁, d₂ 型土器破片のように土にまぎり込んでいるような形跡はない。

又円筒上層式 a, b 型土器を使用した住民は、移住して来た時に竪穴式住居を作ったが、この際掘り上げた再堆積土中に、円筒下層式 d₁, d₂ 型土器破片がまざっている時は、穴の底には円筒上層式 a, b 型土器が、穴の周辺には円筒下層式 d₁, d₂ 型土器破片が出土することになり、地殻し、其の他の作業で土を攪拌したところは、円筒上層式 a, b 型、円筒下層式 d₁, d₂ 型土器破片が混然一帯となって出土する。

再堆積層中に出土する土器の種類と出土位置が、必ずしも古いものが下層に、新しいものが上層

に出上しないで、一定の傾向を示さないのは以上のような原因によるものと推測する。

(8) 奥尻ローム層

奥尻ロームは黄褐色の粘土質土壤で、遺跡付近では基盤の土層を形成している。奥尻ローム層の上層は、且つて地表で長らく風化して腐植を多量に蓄積して黒色を呈し、次いで黒褐色、更に下層は黄褐色と漸移し、土壤学で云う A 層、B 層、C 層に分化している。

本層にも円筒上層式 a, b 型土器、並に円筒下層式 d₁, d₂ 型土器が出土する。

円筒下層式 d₁, d₂ 型土器の出土するところは、再堆積層形成の際、土壤の削剝流失を免れたところで、このようなところでは奥尻ローム層の直上は O₁ 白ハン層である。

円筒上層式 a, b 型土器の出土状況は 2 つに区別出来る。その一つは再堆積層の被覆しないところに、再堆積層形成後の時代になって、円筒上層式 a, b 型土器を使用した住民が移住して来て、置去りにしていったもので、もう一つは、再堆積層の被覆しているところに、円筒上層式 a, b 型土器を使用した住民が移住して来て、深い堅穴を掘り、穴の底が奥尻ロームに達し、その穴の底に円筒上層式 a, b 型土器を置去りにした場合である。後者の場合には、掘上げた再堆積層中に円筒下層式 d₁, d₂ 型土器破片のまざっている時は、円筒上層式 a, b 型土器の上位に円筒下層式 d₁, d₂ 型土器破片が出土することになる。

又奥尻ローム再堆積を免れたところでも、禪文海進の時のような豪雨がなくても、其後現在見られる程度の大雨水や融雪に絶えず見舞われており、この際堅穴の周辺から穴の底に向かって、たとえ少量づつでも、絶えず土が流れ込むことは常識的にも考えられる。若しこの流れ込む土壤中に再堆積層の土があり、この中に円筒下層式 d₁, d₂ 型土器破片が、たとえ数少なくとも、その一部が堅穴の底に流れ込むことはあり得る。このような時は、円筒上層式 a, b 型土器の上位に円筒下層式 d₁, d₂ 型の土器破片が出土し、場合によっては両者混然一帯となって出土する。

以上が青苔遺跡の土層構成と道路との関連を、土壤学的立場から見た解説である。

5 調 査 の 方 法

町道分岐点 発掘区はグリッド方式を探用し細分した。発掘区は道々と町道が接する三叉路より 70m 町道に入った現道路下と、東西の道路沿いである。発掘区の大きさは東で 84m、西側で 96m、幅は処によって異なるが凡そ 16m から 24m の長さである。各グリッドの長さは一辺が 4m の正方形で南から北に向かって 1~21、東から西に向かって A~F と命名した。この東西、南北軸の交叉によってできるメッシュは A-1, F-1, A-21, F-21 グリッドのように呼ばれる。精査の場合は 4m のスクエアグリッドを 2m あるいは 1m グリッドに細分し、時計回りに a~d の符号を与えることにした。セクションベルトはグリッドの北面と東面に 1m の幅で残し、調査の進行に従って順次とりはずした。土層断面は B, E, F の両面と E の東面を南北に、1~21までの東西ラインの A~F を 8~16m おきに実測した。また困難が予想されていた現道路下は道路西側と東側から発掘を進め西側部分の完了をまってブルトーザを導入した。除去される砂利層を西側に埋め仮道をとおすことによって道路閉鎖を回避し、交通の円滑を計った。

懸崖地点 前年より調査を継続しているところだが、発掘区は南北に細長い。グリッドは北から南に向かって一辺が 4m の正方形グリッドを 14 区設け、北から C-1~C-14 と命名した。これを輪

にC-1-C-4の両側を4mに延長しCw-1-Cw-4の4区とC-5-C-14の東側を4m延長してCw-5-Cw-14の9区、合計28グリッドを設定した。

貝塚地点 ここも前年度よりの継続調査である。発掘区は道々東側の台地に細長い。発掘区の西北端をとる磁北線を引き、東西の横線を直交させ、1辺が4m正方形のメッシュを設けた。グリッドの呼称は西辺に北から南に向ってA～Nとし、西から東に向って1～10とした。セクションベルトは原則として各グリッドの南と西に1mの幅で残し必要に応じて取り除くことにした。上層断面は南北に8面、東西に5面を測ったが貝層を存在する重要な箇所では平面と鉛直面を是正するうえからもベルトの両面をとり慎重を期した。また貝層の平面分布については密度に応じて4m正方形グリッドを一辺が50cmの16グリッド、40cmの25グリッドに細分し、更に局部的に精査を必要とする箇所は一辺を20cmとした。前年、積雪によって発掘調査が不可能となり中断したグリッドはJ-Lの6～10区の各グリッドであるが、そのうちJ-7, 8, K-8, 9は貝層の存在が予知されていたので表層の撤去を見合わせていたため融雪の弊害を受けなかつたが、L-10の一部に若干の凍土による貝層の流亡が見られた。

6 遺物および遺構の出土状況

町道分岐点 遺物は乙部層と駒ヶ岳e層との間に挟在する比較的薄い10cm前後の層厚をもつ黒色土層（上面はOsb層、下面はKoc層の腐植と思われる）（擦文式土器が包蔵され、再堆積層に円筒下層式土器および上層式土器、古期ローム層の薄い腐植層の上部に少量ではあるが絵条体や貝殻文、施された上器、尖底上器片などの早期の上器が含まれている（第1図版）。

発掘区内での平面的分布は擦文式上器がA-12, B-10～11, E-6, E-15～16区から瓶、魚骨小量の貝を伴って出土した。中で特に注目されたのはA-12区出土の完形の壺形土器である。その器形は在来の擦文式土器ではなく、須恵器に多く見られるものである。またB-10～11区では深鉢形土器と呼なり大型の動物造形アシカ或いはトドの類一が共作し、E-15～16区では多数の大小の海獸性と小量のアワビ、ウニが混涵するなかから骨角器、大型の鉄製釣針、直径15cmほどの半球状の橢形鉄滓が出土している。

再堆積層から出土する円筒下層式土器、上層式土器の広がりは殆んど全グリッドに及んでいる。最も集中していた箇所はE-10～17, F-10～17区で大型の土器片が170m²ほどの広さに散詰められた状態にあり、更にそれは層厚30～40cmほどの間に4～5面と重なり合って出土した。（第2, 3図版）土器の型式は円筒下層式土器c, d₁, d₂, 上層式a, b型土器である。この下層式、上層式は正常な堆積層下での包含であれば当然下層式は上層式の下位に位置しなければならないが、再堆積層が生成される過程で両者は混交し、その序列は失われている。したがって層位区分は不可能である。この時期の包含層は青苔遺跡ばかりでなく、広く渡島半島、津軽下北・帯が同様な傾向にある。各型式の明確な区分が容易でないのも一つにはこれが原因しているといえるだろう。しかし、その再堆積層を掘り下げるに堅穴群の遺構が出現する。出土する遺物は各堅穴のプランに即した型式の土器がセットされた状態にある。ただ円筒下層、上層式a～b型とされる土器を複数の堅穴は出土量が極めて少なく個体をなすものは稀で石冠のみ多い。堅穴とのセットで遺物が安定しているのは円筒上層式土器末期にあたる見晴町式土器だけである。

町道分岐点で確認された堅穴の数は不完全なものも含めて20軒である（第4図版）。プランには

大別して4つのタイプがある。1) ほぼ円に近い楕円状の外周をもち、内を方形に掘り下げて、その各隅に主柱をたて中央に囲いのないがのあるもの、2) 1)と同様であるが主柱が方形掘り込みの外、テラスにあるもの、3) 外周が長楕円で内の掘り込みを六角形に型取り各角隅に主柱を設け中央に柱のあるもの、4) 外周が長楕円で内の掘り込みが五角形をなし、主柱が不規則に配列され、炉址も数ヶ所に見られるものなどである。以上の4タイプはそれぞれテラスをもち、中には2段のテラスでないかと見られるものや長径が15mに及ぶ巨大なものもある。各プランはタイプごとに方位性があるようにも見受けられるが判然としない。

懸崖地点 遺物は乙部層の直下から擦文式土器、再堆積層から少量の円筒式土器が出土する。遺物が最も集中的に出土したのは発掘区の北端東側C-1~4、Cw-1~4区である。この地点は貝塚とほぼ同一高さで、かつては浜だったと考えられる現在の道々を挟んで浜口に対峙した位置にある。C-2区の地表下45cmで西側方向に深く落ち込む乙部層を認め豊穴を想定してCw-1~4にグリッドを拡張した。遺物は深鉢形の擦文式土器と台付土器が壁にもたれ突き立てるような状態にあった。周壁の確認を求めてCw-3区を20cmほど掘り下げたところで東側に落ち込む乙部層を見え、同時に西角隅に露呈した灰茶褐色の再堆積層と両する充頭上への拡がりを検出した。ここでの出土遺物も前例同様に大形の深鉢形土器片が器の内面を上にして突き立った状態で出土した。Cw-3区内の黒色充頭上はやや温潤で多くの小円礫を混え、土器の多くは比較的大きな破片が多かったが完形となるものはなかった。ただ面積比からみた出土量は相当な数である(第5回版)。周辺グリッドの掘開が進むにつれ、黒色充頭上の拡がりは北に長く伸びる浅いU字溝となつた。遺物は西側の斜面に多くみられ、Cw-2区で魚骨層が一面に覆うところもあり、鉢状の木炭粒が处处に焼土痕を残している(第6回版)。遺物の出土傾向が異常なのは下表が示すとおりである。

U字溝の大きさは大略4m×10mであるから1m²に約160点の土器が集積していたことになる。筆者らはこれを土器集積溝と仮称することにした。完掘での溝の状態はかつての河床らしく基盤層に流路の痕跡が見られ、その窪地を利用した公算が強い。

出土遺物の種類は鉄製品に刀子、鐵環、円盤状のものに鉄心を通したもの、骨角器に銛先、刺突器、石器に有孔石器土製勾玉があり、復原できた擦文式土器は80%が台付土器である。

Cw-1	313	C-1	367	680
Cw-2	2,017	C-2	771	2,788
Cw-3	1,734	C-3	417	2,151
Cw-4	475	C-4	270	745
	4,539		1,825	6,364

(注) Cwは凡そ西側斜面、Cは溝の中央もしくは東側斜面、数字は土器片のみで、石器・鉄器・骨角器は含まれていない。

C-5区では台付土器の底にアイヌのイトッパに類似した入字や同心円文、幾何学的刻印のあるものが出土しているが、特に刻線画が描かれている台付の装飾土器は秀逸である。これについては後述する。

C-10区西壁寄りの乙部層直下から埋葬人骨が発見された。ほぼ西頭位の伸展葬で頭蓋と下肢骨の一部が遺存していたが腐植が落しい。副葬品は頭部南側に長さ70cmほどの腰刀(横刀?)を添え胸部に玉飾がおかれていた(第7回版)。

玉飾の種類は硬玉製勾玉1個、水晶製切子玉1個、水晶製平玉30個、ガラス製小玉19個である(第8回版)。勾玉は古墳時代の代表的工芸品の一つで弥生時代の製作技術がそのまま受け継がれたものである。形態的には古式のものはCの字を呈し、時代が下がる瑪瑙製のものなどはコの字に近く研磨も粗雑である。本資は頭の部分に丁字頭の装飾がある(第12回版)。被葬者は扁平な山石、硯化木などで西北面が長径4mほどに囲まれている。かつては東南面にもあったらしい。直ぐ側に肥し溜があり耕作者が幾つかの大きな石を取り除いたことを記憶している。埋葬遺体と石組は同一レベルにあり壙を掘り込んだ形跡はない。恐らく長方形の石組みのなかに遺体をおき盛土したもの

であろう。このような葬制は擦文式土器文化の伝統にはない。前述の土器集積溝からも土製の勾玉が出上しており、鉄製品の豊富な内容、装飾土器、C-13、14区から出土した土師系土器といい本州渡來の文化的色彩が強い。

貝塚地点 貝塚はJ-7、J-8、J-9の一部、K-7、K-8、K-9、K-10の一部、L-10、M-10区に分布しており、J-7、8、K-8区に厚い堆積を示している。貝層はJ-7、8区で第1、2層と区分することができたが他は単層である(第9回版)。貝塚を構成する貝の種類はホタテガイ、ビノスガイ、アカガイ、エゾタマキガイ、エゾアワビ、サルアワビ、ユキノカサ、ヒメゾボラ、ツメタガイ、クボガイ、オオヘビガイ、イボニシ、イシダタミ、エゾバカガイ、イタヤガイ、バイ、ウチムラサキ、エゾバフンウニ。哺乳動物ではアシカ、トド、コミミアザラシ、ネズミ、鳥類ではアホウドリ、カモメ、タカ(爪のみ)、魚類ではソイ、ホッケ、カレイなどである。なおこれらについては金子浩昌氏が分類中なので上記のリストは大巾に増加されるだろう。(第10回版)

出土遺物はI-7、J-7、J-8、K-8、K-9に集中している。土器は深鉢形擦文式土器、台付土器、坯形土器片などで貝層中より出土した土器片の総数は7,514である。骨角器には廻転式離頭鈎頭、鈎柄、刺突貝、針などがあり、なかでも鉄鎌を装着した状態で出土した離頭話は貴重である。鉄製品では小刀子(マキリ)、断面が四角形で両端を尖角化したヤス状のもの、鉄環、のほか鉄滓、羽口が出土している。この鉄滓、羽口は前年度に報告した鍛冶址とともに青苗道跡の擦文式土器文化を解明する上に極めて重要な役割をもっていると思う。51年次に検出された貝塚台地上の鉄滓は道々向いに対する発掘区G、Q-R、懸崖地点C、E-11区、町道分岐点G、E-14-15区からも出土し、鍛冶址の分布が広範囲に及んでいることが明らかになった。形状は共通して鍛冶滓特有の楕円形で大きさは長径が10~15cmの円形ないし橢円形で、表面は粗雑で多孔質、暗灰黒色である。砂鉄を原料とした製品の再製錬の産物とみられるが、G、E-F区の焼上土から大量に一括出土した褐鉄鉱の小片などを使用した可能性もある。この鉄滓は通常、吹子口直下の火床中にしつらえられるので羽口も共伴関係で出土している。羽口も各地点で発見され、粘土製、石製(砂質泥岩?)とがある。粘土製のものは一端が溶解して青緑色に釉薬をかけたような状態になっている。また石製のものは外側が多角形で縦割りに2分された珍しい型である。なお鉄滓、鉄製品については日下、質量定量分析、化学分析などをはじめているので近く実態を明らかにすることができるだろう。

7 新 資 料

須恵系装飾土器(第11回解)

土器の高さ71mm、器の口径163mm、底径61mm、厚さ5mm、高さ9mm、背面部は欠失している。

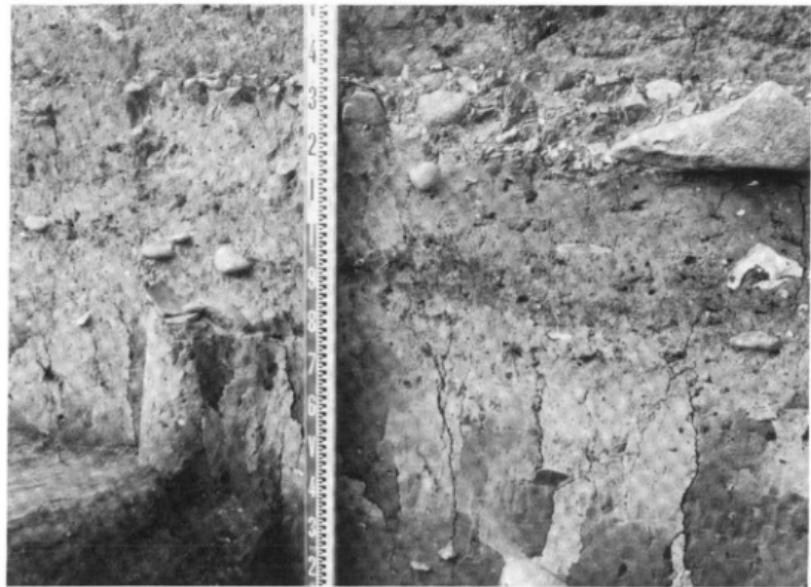
この土器は、灰褐色をした須恵器系統の坯形土器の表面に動物、鳥などを刻線で描いたものである。この類のものは関西方面に多く、東北、北海道地方には、出土例がないように思う。

写真は右が動物で馬の側面観のようである。背にあたる部分の刻み目はタテガミであろう。

左は縦様に止った鳥であろう。こうした止り方をする鳥はケラの仲間しかない。体部の羽毛の斑点も、刺突痕によってそれらしく見えるが、足部の割りにはデフォルメ(誇張)されてよい窓の嘴がどうも素氣なさすぎる。

ケラ類でないとすれば、足部の状態から爪鋭く足の強い獣とも考えられる。因みに隣接する貝塚

第1図版



町道分岐点 G.E-13区西側土層断面。スタッフ左は再堆積層に包含された円筒式土器

第2図版



町道分岐点 G.E-14区 円筒上層式土器の出土状況

第3図版



町道分岐点 G.E-16Eの出土状況

第4図版



町道分岐点 聖穴住居址群。向い側道路は仮設の町道

第5図版



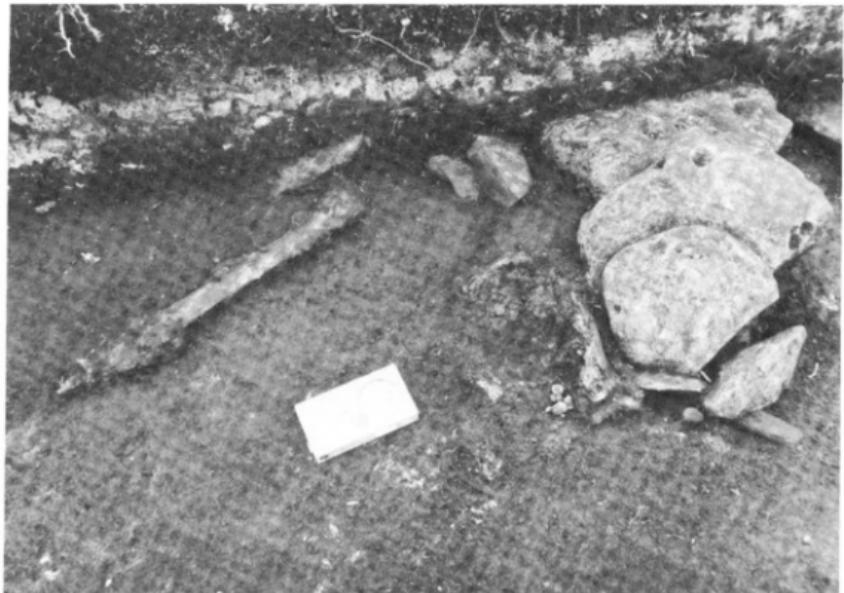
懸崖地点 C-3区 土器集積造構中央の出土状況

第6図版



懸崖地点 Cw-2区 上器集積造構西面の出土状況

第7図版



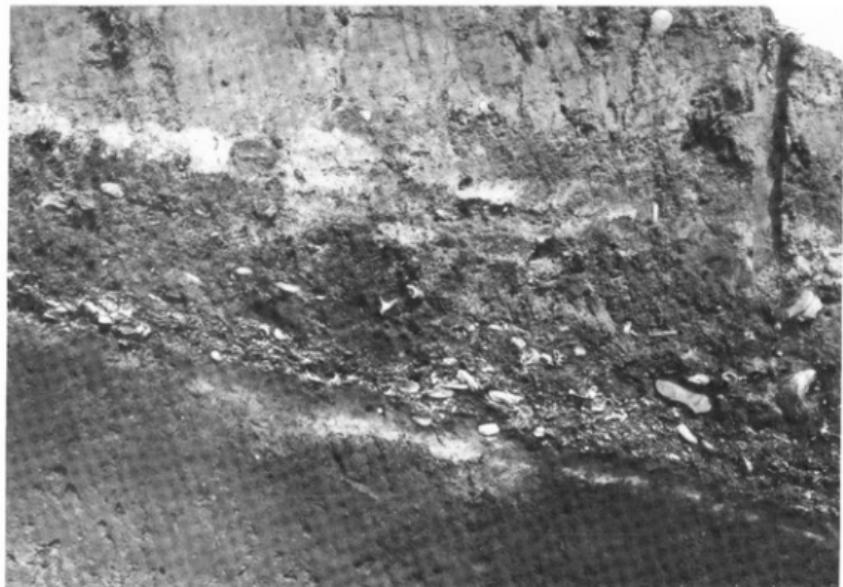
懸崖地点 C-10区出土の入骨、クリノメーター右上が頭蓋。左上が副葬品の腰刀？

第8図版



懸崖地点 C-10区出土の被葬者が所有していた玉類

第9回版



貝塚地点 S.K-8区東側の土層断面。貝層上の白い層が乙部層。下が駒ヶ岳層。

第10回版



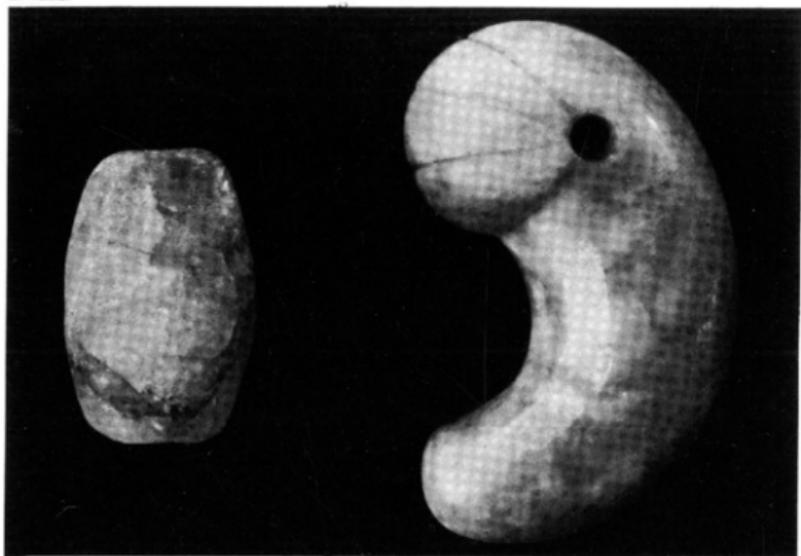
貝塚地点 貝殻と擦文式土器の出土状況

第11図版



懸崖地点 C-4区出土の装飾土器

第12図版



懸崖地点 C-10区出土の玉類。左水晶製切子玉、右硬玉製勾玉

でケラ類の遺骸は検出されなかったが、鷹の爪が2点出土している。

奈良・平安時代の東北・北海道地方が名高い馬産地であったことは「扶桑略記」に出羽国と渡島の蝦夷87人が朝貢し、馬1,000千匹を献上したとあることからも判る。

このような馬の生産力はエビスの機動性に富む戦闘力を支え、政府の北辺政策に対する大きな壁になっていたから、エビス、政府とも勢力展開の要は一つに馬産地の支配にあった。

また、鷹については、仁徳天皇の時代に中國から伝来した鷹狩りが行われたと書紀にも見えるので、需要も多くエビスの特産である鷹は羨望的であったろう。

付 記

この概要是発掘時の所見をもとに各地点の特色を大まかにまとめたもので省略した点も少なくなく、また整理段階で得られた成果については殆んど触れていない。52年次調査の大局を汲取っていただけたら幸いである。

青苗遺跡発掘調査概報

—道々奥尻線青苗市街～空港間道路整備事業
に係わる緊急発掘調査—

昭和53年3月20日印刷

昭和53年3月31日発行

編 者 佐 藤 忠 雄
発 行 奥尻町教育委員会
北海道奥尻郡奥尻町
印 刷 三采プロセス㈱